

学習内容：三大和歌集の比較 表現技法 資料 和歌「万葉・古今・新古今」	date：	年	月	日
	学籍番号			
氏名				

三和歌集の比較

表現上の特徴 概念特色(歌風)・歌の心(精神)	技法	調子	作者	収められている の種類(形式)	歌数	編者(選者)	成立時代 成立の背景	
・素朴でかざりけがない ・感動をありのままに表 現し、直線的で実感的 力強く()的 ↑ 【ますらをぶり】 素朴力強い 「まこと」	枕詞・序詞が多い 反復・対句が多い	()調 二句切れ、四句切れが多い	天皇から農民、兵士にいた るまで、幅広い階層 〔東歌防人の歌〕含む	短歌 五七五七七 長歌(約60首) 五五五……五七七、 せどうか 旋頭歌(約60首) 五五五七七、 ぶつそくせきか 仏足石歌(一首) 五五五七七	二十巻 約四千五百首	不明 おわたものやかもち 大伴家持と言われている	()時代末 《八世紀後半》 ※現存する日本最古の歌集 〔万葉仮名 表記〕	万葉集
・技巧を用いて理知的 想像・屈曲させて表し、 曲線的 情趣的な美を重んじ、 ()的 ↑ 【たをやめぶり】 繊細 優美 「もののあはれ」	序詞 掛詞・縁語 擬人法が多い 枕詞	()調 三句切れが多い	六歌仙、平安歌人、 読み人知らず 六歌仙Ⅱ 在廬筆、小野小町 僧止遍語 おののこゝろあはれし 本住黒主 文庫慶雲 嘉祥師	ほとんど短歌 (長歌3首 旋頭歌4首)	二十巻 約千百首	()紀友則 みづのたのみかね 壬生忠実たち ()、凡河内躬恒、	()時代初期 《十世紀初め》 醍醐天皇の勅命によって編 集されたわが国最初の勅 撰和歌集	古今和歌集
・技巧に走り、実感から遠 ざかつて難解 ・余情を重んじ、現実生活 から逃避して観念的 絵画的 幻想的 ゆうげん 「幽玄」「有心」	掛詞など本歌取り 体言止めが多い	()調 初句切れ、三句切れが多い	おもに 当代(平安末)鎌倉初期歌人	すべて短歌	二十巻 約千九百八十首	()、 藤原家隆たち	()時代初め 《十三世紀初め》 後鳥羽上皇の命によって編 集された八番目の勅撰和 歌集	新古今和歌集

【和歌で用いられる表現技法】

枕詞……ある特定の語を導き出すために前に置く五音の語

枕詞
あそによし ならのみやこは 咲く花の にほふがごとく 今盛りなり

枕詞	係る言葉	あかねさす	紫・日・照る	枕詞	係る言葉	ぬばたまの	黒・夜・闇
あしひきの	山・峰	あらたまの	年・春・月	くさまくら	旅・露	ひさかたの	光・天・空
あをによし	奈良	しろたへの	衣・袖・袂・	みづとりの	立つ・うき	むらぎもの	心
いはばしる	垂水・滝	たらちねの	母・親	ものふの	八十(やそ)	やくもたつ	出雲
うつせみの	命・世・身	ちはやぶる	神	やくもたつ	出雲		

●**序詞**……ある語句を導き出すために置く語で、枕詞と違って音数は不定で、かなり長いものもある。

序話
あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

掛詞……ひとつの言葉に二重の意味を兼ねさせ、上下の句にかけて用いる技法、かけことば

花の色は移りにけりないたづらに
我身世にふるながめせしまに
(同音異義語を利用した技法)

「眺めていこうちに」(時間か経る)、「長雨が降り続いているうちに」(長雨が降る)「ふる……」「経る」「降る」とを掛けている。ながめ…「眺め」「長雨」とを掛けている。

●縁語――ある語と意味上の関係のある語（縁のある語）を使って調子を整え、連鎖をからませて、表現効果を高める技法。

すずか山浮世をよそにふりすてていかになりゆく我身なるらん

ほんか
で「金」の総言と「
掛」の「
本歌取り」有名な古い和歌の一部をよみ込んで、二重写しにし、いっそう複雑な

心情をかもしだして感動を深める技法。

《本歌取りの歌》ほのぼのと春え空に来にけらし天の香眞山霞たなびく『新古今和歌集』後鳥羽上皇

●**体言止め** 終わりを体言(名詞)で止め、言い切らないことで、深い余情を残す技法

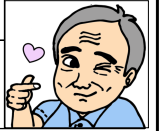
※この他に「比喩(たとえ)」「擬人法」、「対句」など

学習内容：古今和歌集 仮名序
万葉集

date： 年 月 日

学籍番号

氏名



和歌「万葉・古今・新古今」

古今和歌集 仮名序

やまとつたは人の心を種として
よろづの言の葉とぞなれりける。
世の中にある人、ことわざ繁きものなれば
心に思ふことを、
見るもの、聞くものにつけて、言ひ出せるなり。
花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、
生きとし生けるもの、
いづれか歌をよまざりける。
力をも入れずして、天地を動かし、
目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、
男女のなかも和らげ、
猛き武士の心をも、慰むるは歌なり。

●万葉集

春過ぎて 夏来るらし 白たへの衣千したり 一の香具山 持統天皇
△句切れ(切れ目)となるところに「一」を入れよ 二か所 五七調

春が過ぎて、夏が来たらしい。真う白な衣が千してあるよ、天の香具山に。
※持統天皇が藤原京から見た風景とされる 持統天皇は天武天皇の妻。女性天皇。

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば 月傾きぬ 柿本人麻呂

東の方の野にあげぼの光が見えて、振り返って見てみると、月は西に傾いている。

君待つと我が恋ひ居れば 我が屋戸のすだれ動かし 秋の風吹く 額田王

あなたのおいでを待って私が恋しく思っておりますと、我が家の戸口のすだれを動かして、
秋の風が吹いております。

※額田王は天武天皇の妃、のち兄の天智天皇に寵愛される。この歌は天智天皇を想う歌とされる

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 山部赤人

富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ
照る月の 光も見えず 白雲もい 行きはばかり 時じくぞ
雪は降りける。語り継ぎ 言ひ継ぎ 行かむ 富士の高嶺は

△歌の形式(長歌)

天地が分かれたときから 神々しく高く貴い、駿河の国にある
富士の高嶺を 広々とした大空に 振り仰いで 遠く見やる、空を渡る太陽の姿も隠れ
照る月の光も見えず、白雲もはまされて 行き滞り、時季を定めず
雪は降っている。語り継ぎ、言い継いでいこう、この富士の高嶺は、

反歌 ※「反歌」は長歌に添えられる 長歌の情景を要約した短歌

田子の浦のうち出て見れば 真白にぞ 富士の高嶺に雪は降りける

田子の浦を通して出て見ると、おお、なんと真う白に富士の高嶺に雪が降っているよ。

古典資料

「ば」の用法 (訳すときの参考に)

△已然形 + ば …… 確定条件「(もし、もし)」
△未然形 + ば …… 仮定条件「(もし、もし)」

やまとつたは人の心を種として、(そこから芽生えて)種々
さまざまの葉になつたものだ。この世の中に生きている人々
は、さまざまの出来事に関わっているのだから、心に思ふことを
見るもの、聞くものに託して、言ひ表したのである。花の間に
鳴く鶯、清流にすむ河鹿の声を聞くと、生きている全ての
ものの、どれが歌を詠まないとはいえるだろうか。カヒとつ入
れずに天地の神々の心を動かし、目に見えないものも、勇
猛な武士の心をも、和らげるのが歌なのである。

「係り結び」特定の助詞があると文末が終止形で終わらぬ法則
特定の助詞 文末
なむ・ぞ・や・か …… 連体形
こそ …… 已然形

▽「古今和歌集」の序文に記された「仮名序」
○誰の著したものとされているか (紀貫之)
○人の心を(種)にたとえ、和歌をその(種)から生まれいずる(葉)にたとえている。
○「いづれか歌をよまざりける。」「反語および係り結び
だが歌を詠まないとはいえるだろうか、いや言えない。
つまりどれもが(歌を詠む)という意味。

憶良らは今は罷らむ 子泣くらむ それその母も我を待つらむぞ 山上憶良
▽罷る 上位から下位へ「行く」ことをへりくだつていう語
私、憶良はもう退出いたしました。子供が泣いておりましよう。それ、その母親も私を
待っていることでしょう。

▽その母とは 憶良の妻 つまりこれは 母のろけ

多摩川にさらす手作りさらさら何ぞこの児のこた愛しき 東歌
▽「序詞」の部分に「線」 掛詞 さらさら さらさらさらさら

多摩川にさらす手織りの布のように、さらさらになんてこの娘がこんなにもいいの。
※東国の若者の恋歌と言われている わが子をいとおしむ歌ともいわれる

父母が頭かき撫て 幸くあれて言ひし言葉 忘れかねつる 防人歌

▽防人 九州地方の警備にあつた各地方から赴任した兵士
父母が頭をなでて、無事でいるように、と言った言葉が忘れられない。

新しい年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事 大伴家持
▽いやしけ 、「いや重け」「いや」接頭語で「ますます」の意

新しい年の初めの、正月の今日降る雪のように、もっと積もれ、よいことよ。

◎万葉集の特徴をとらえよう。

見たまんま 感じたまんま 率直 素直 単純 素朴 直線的 男性的 力強い
雄大な など

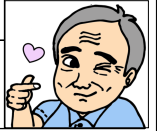
技巧としては 同じ方向性をもって重ね掛けする美観(価値観) 鬼に金棒の

学習内容： 古今和歌集
新古今和歌集

date: 年 月 日

学籍番号

氏名



和歌「万葉・古今・新古今」

▽古今和歌集

人はいさ心も知らず ふるさとは花ぞ昔の香にほひける 紀貫之

詞書に、長谷寺参りに行くたびに作者が泊まっていた宿の主人が「宿は昔のままにありまうのに、近頃は泊まっていただけせんね」と言ったことに對し返した歌とある。人の心は、さあ、どう変わってしまったかわかりませんが、昔なじみのなつかしい土地では、花が昔のままに香っていることですよ。

★この歌をもつドラマチックに想像しよう。

「人はいさ心も知らず」から想像できることは、宿の主人の言葉の中に「最近来ないのは、他によい場所でも見つけたからですが、人の心は変わりやすいって言いますもんねえ。」という皮肉(嫌味)のふくみを感じたからだと思われる。

その先 ← 昔なじみのこの地の梅の花は昔と変わらずよい香り、快く私を迎入れてくれますよ。それに対して主人、あなたは、嫌味で私を迎えるのですね。おや？、変わってしまうのは、主人、あなたの方だ！ドーン!! (喪黒福造風)

相手を完膚なきまでにたたきのめす 切り返し の妙

在原業平

ちはやぶる 神世もきかず 龍田河 韓紅 に水くくるとは

このようなことは神代の話にも聞いたことがない。龍田川の水を美しい紅色に絞り染めにするとは。

▽ 韓紅 Ⅱ 紅花で染めた鮮やかな濃い紅色 Ⅱ 紅葉をあらわす

▼ たとえ 紅葉が浮かぶ龍田川を (織物) に見立て (たとえ) て表現 鮮やかな雅の世界

小野小町

思ひつつ 寝ればや人の見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを

恋しく思い続けながら寝たので、あの方が現れたのでしょうか。夢とわかっていたら、覚めないでいたでしょうに。

藤原敏行

秋来ぬと 目にはさやかに見えねども 風の音にぞ おどろかれぬる

秋が来たと、見た目にははつきりとは見えないけれど、(さわやかな)風のたてる音でそれと気づかされた。

▽新古今和歌集

道の辺に 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ 西行法師

道のほとりに清水が流れている、柳の木陰よ。ほんのしばらくとて、立ち止まったのであったが。

重要 ◆ この訳の続きにうかがえる情景(内容)とは

つつい長居して(長い時間過して)しまった。

・ なんてそうしちやったのか Ⅱ (あまりに心地よかった) から

● 歌に表されたその先(奥)にある情感(味わい)を捉えるのがポイント

▼ その結果浮かび上がる対比の構造 (しばし) [短い時間] ⇔ [長い時間]

式子内親王

玉の緒よ 絶えなば 絶えね ながら 忍ぶることの 弱りも ぞ する

命よ、絶えるならば絶えてしまえ。生きながらえていると、秘めている力が弱ってしまうかもしれないから。 ※ 確定条件的に訳しているようにみえるが仮定条件

◇ 秘めている力が弱ってしまう Ⅱ 耐え忍ぶ力が弱まり(堪えられなくなつて)漏れ出し、あなたや周囲にもわかつてしまう。

絶えね Ⅱ ヤ行下二段動詞「絶ゆ」の連用形 + 空(強意)の助動詞「ぬ」の命令形

【もう一つの捉え方(先生の見解)】 命よ、絶えるならば絶えてしまえ。このまま長い時間がたっていくならば、あなたを思い慕う気持ちが薄れていくかもしれないから。

「忍ぶ」を掛詞とし、「あなたを偲ぶ思い」が(長い時間の中で)いつしか薄まってしまふのがこわいから Ⅱ 今の熱い気持ちのままで最期をむかえたい

・ どちらが正解というより、両面の意味を兼ね備えた歌ではないか。

藤原定家

見わたせば 花も紅葉も なかりけり 浦の 苫屋の 秋の 夕暮れ

体言止め

見渡すと花も紅葉もないことだ。海辺の苫屋の辺りの秋の夕暮れよ。

藤原定家

駒とめて袖うちばらふ 陰もなし 佐野のわたりの 雪の 夕暮れ

体言止め

馬を留めて袖に降り積もった雪をはらう物陰とてありはしない。佐野のあたり(渡し場)の雪の降る夕暮れよ。

本歌 苦しくも降り来る雨か 三輪の崎 狭野の 渡りに 家もあらずに 【万葉集】

▽ さて、定家の歌の理念とは何か？ 考えてみよう。

殺風景だけでは済まされない何かがある 空想の絵画、枯山水の歌